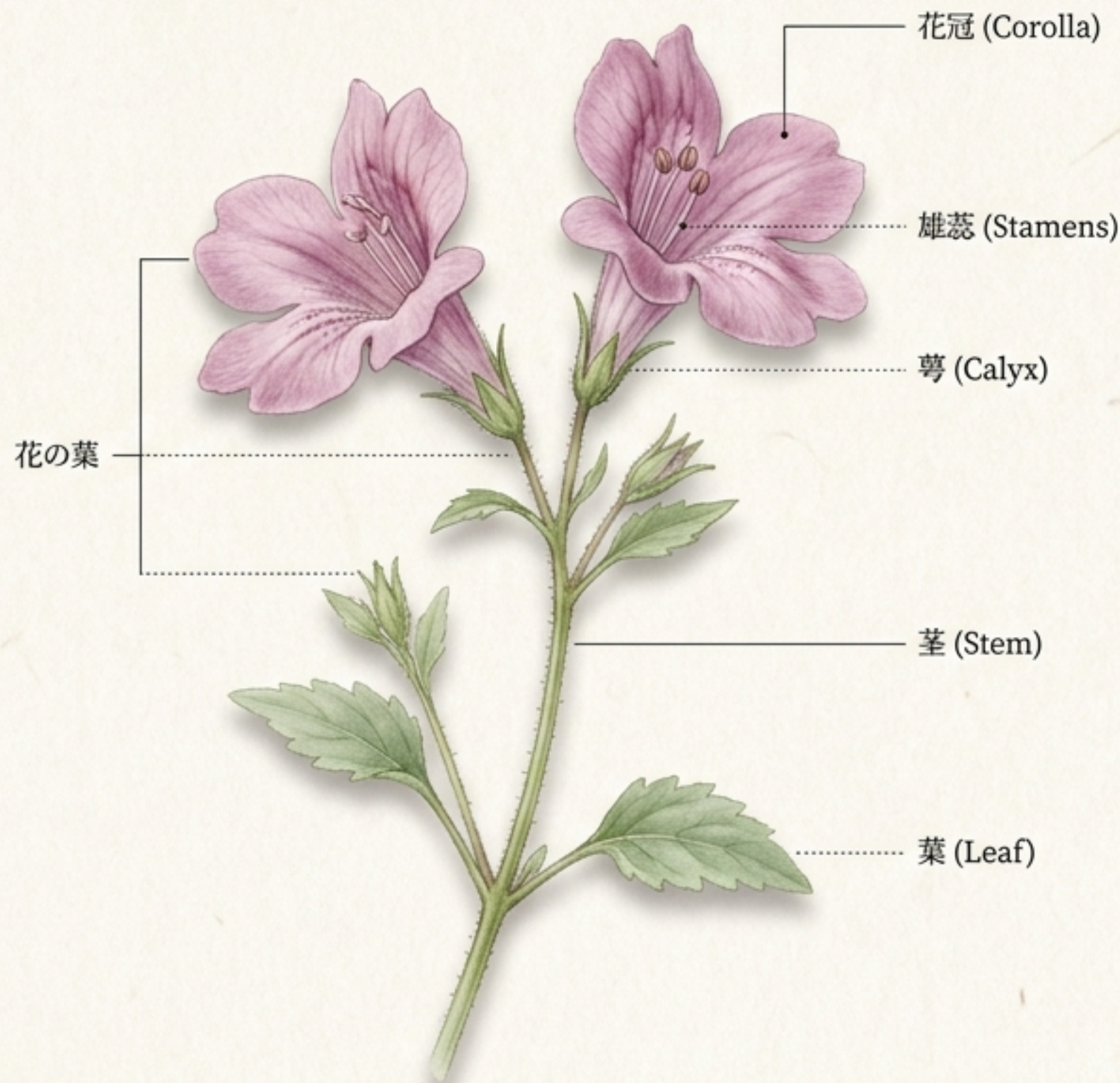


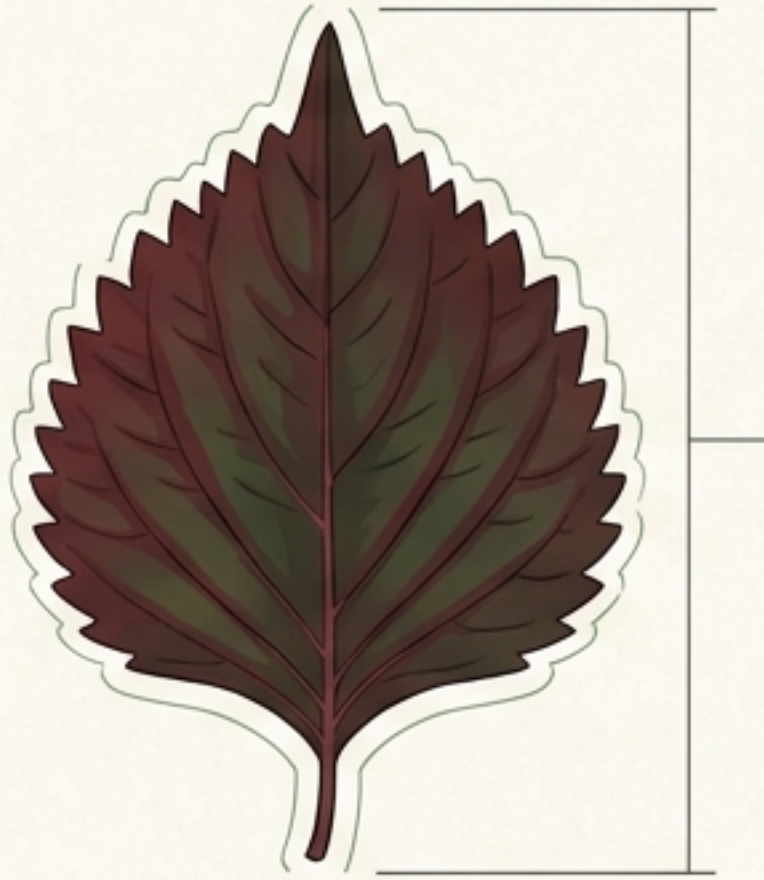
A Micro-Safari into *Mosla dianthera*

ヒメジソ (姫紫蘇) に咲く紅紫の花

秋の足元にひっそりと息づく、
微小な自然の造形美を解剖する



「小さなシソ」であって、シソではない



シソ（紫蘇）

シソ属。食卓でおなじみの栽培種。

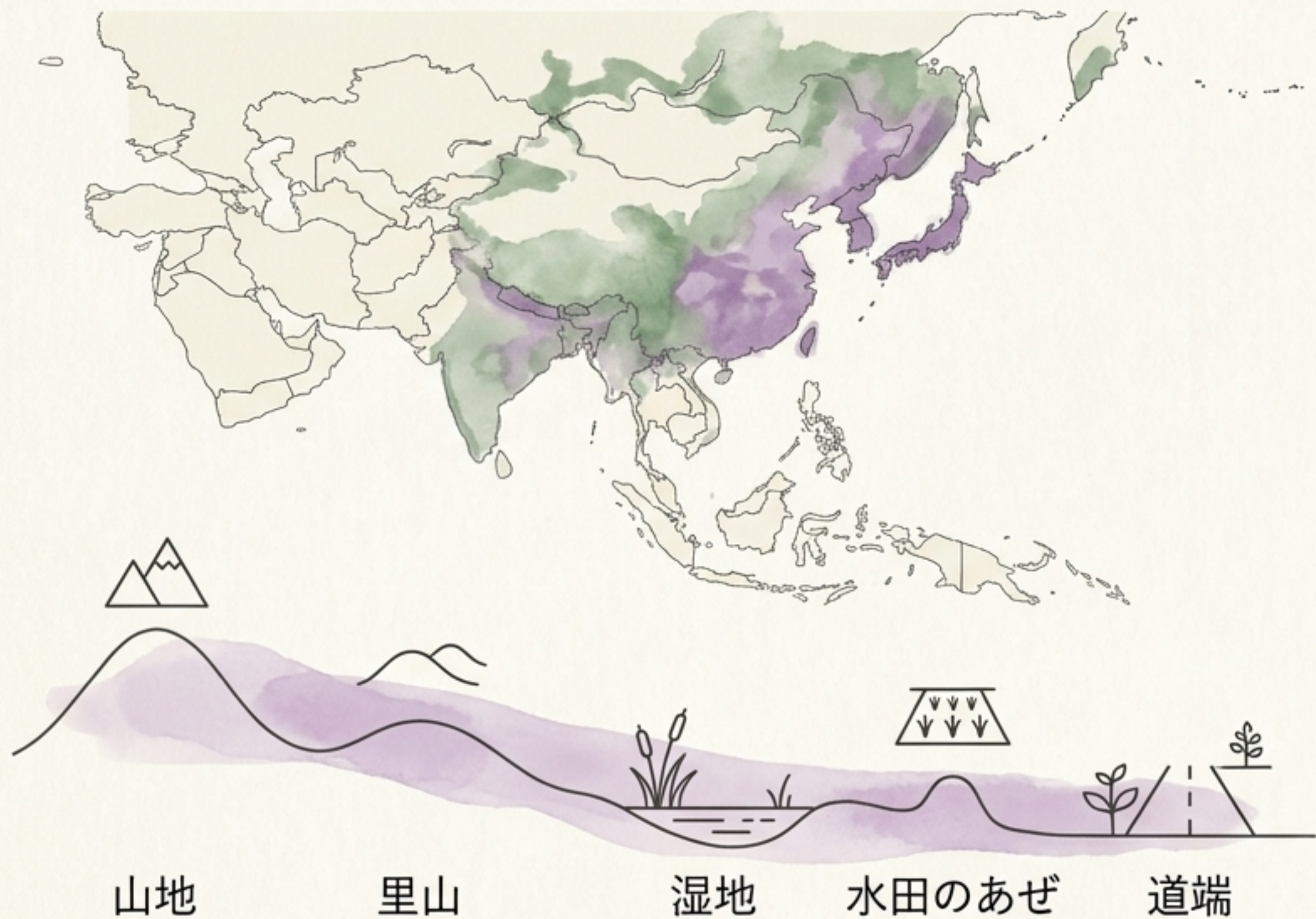


ヒメジソ（姫紫蘇）

イヌコウジュ属。日本全土に自生する野生の一年草。

姿が似ており、シソ科特有の芳香を持つことから「姫（小さな）紫蘇」と名付けられましたが、
分類上は全く異なる野生植物です。

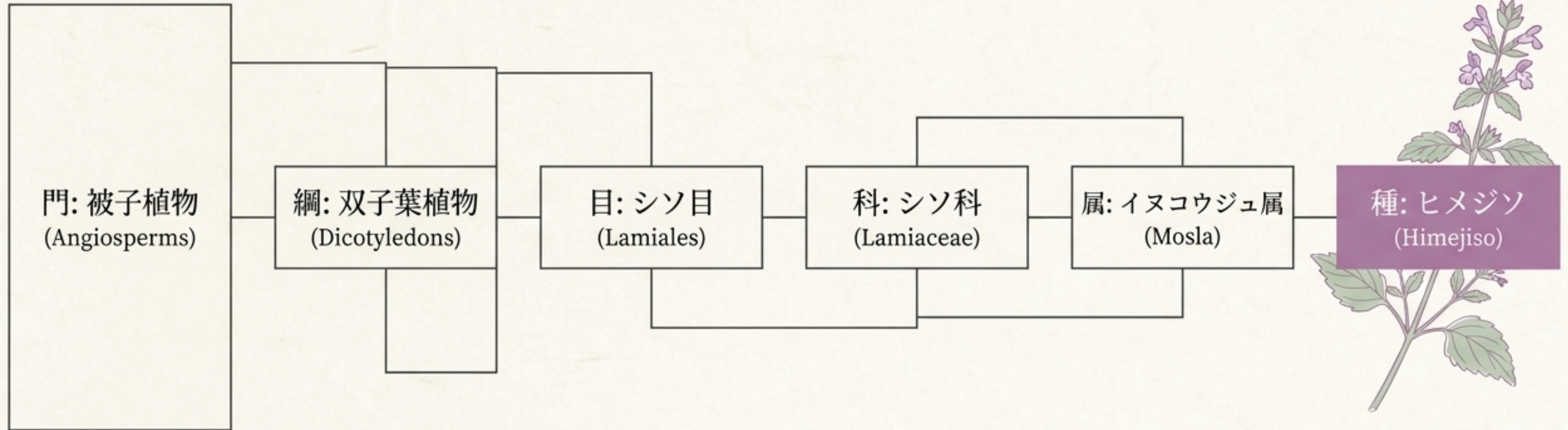
アジアに広く分布する、身近な在来種



日本全土をはじめ、アジア各地（朝鮮半島、中国、台湾、ロシア、インド、ネパールなど）に広く自生。

里山から山地にかけての湿った環境（道端、林の縁、水田のあぜ、草地など）を好む。

植物学的分類



草丈は通常20～60cm。ただし、定期的に草刈りが行われる場所では、わずか10cmほどの小ぶりの姿のまま開花する生命力の強さも持ちます。

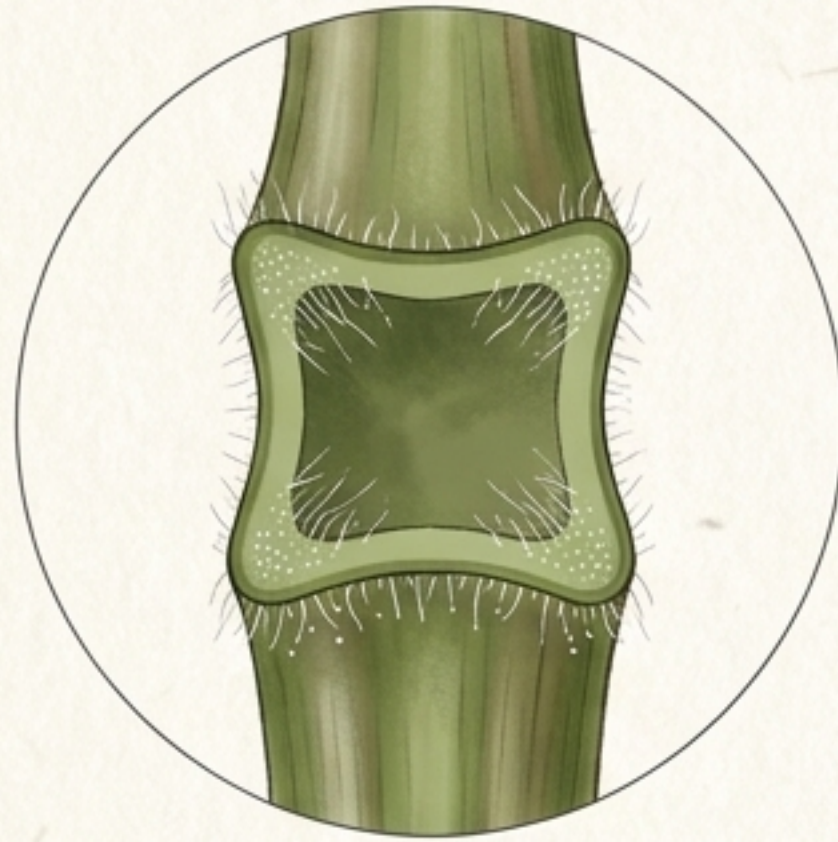
名前に隠された、花の秘密

和名	ヒメジソ（姫紫蘇） 「姫（小型の）」＋「紫蘇（シソに似た姿）」
英名	Miniature beefsteak plant “beefsteak plant”（赤紫色の葉を生肉に見立てたシソの英名）の小型版。
学名	<i>Mosla dianthera</i> [Mosla] = イヌコウジュ属。[di] = ギリシャ語で「2つ」。 [anthera] = 「葯（花粉袋）」。



なぜ「2つの葯」なのか？
その答えは、4~5mmの極小の
花の中にあります。（次頁へ）

茎と葉のアーキテクチャ



四角形の茎

断面は四角形。角の部分や節には、下向きに曲がった短い白い毛が生える。



対生（たいせい）

葉は茎に左右対になってつく。長さ1.2～4cmの卵形～広卵形。裏面には腺点が密生。



粗い鋸歯（きよし）

葉の縁には4～6対の粗いギザギザがある。※これが近縁種を見分ける最も重要なサイン。

秋を告げる、2つずつの開花

花期：9月～10月

長さ3～7cm（時に15cm）の総状花序を伸ばす。

花が2個ずつ対になった「仮輪（かりん）」を多数形成し、まばらに花をつける。

色は淡紅紫色から白色まで、
個体や時期により変化する。



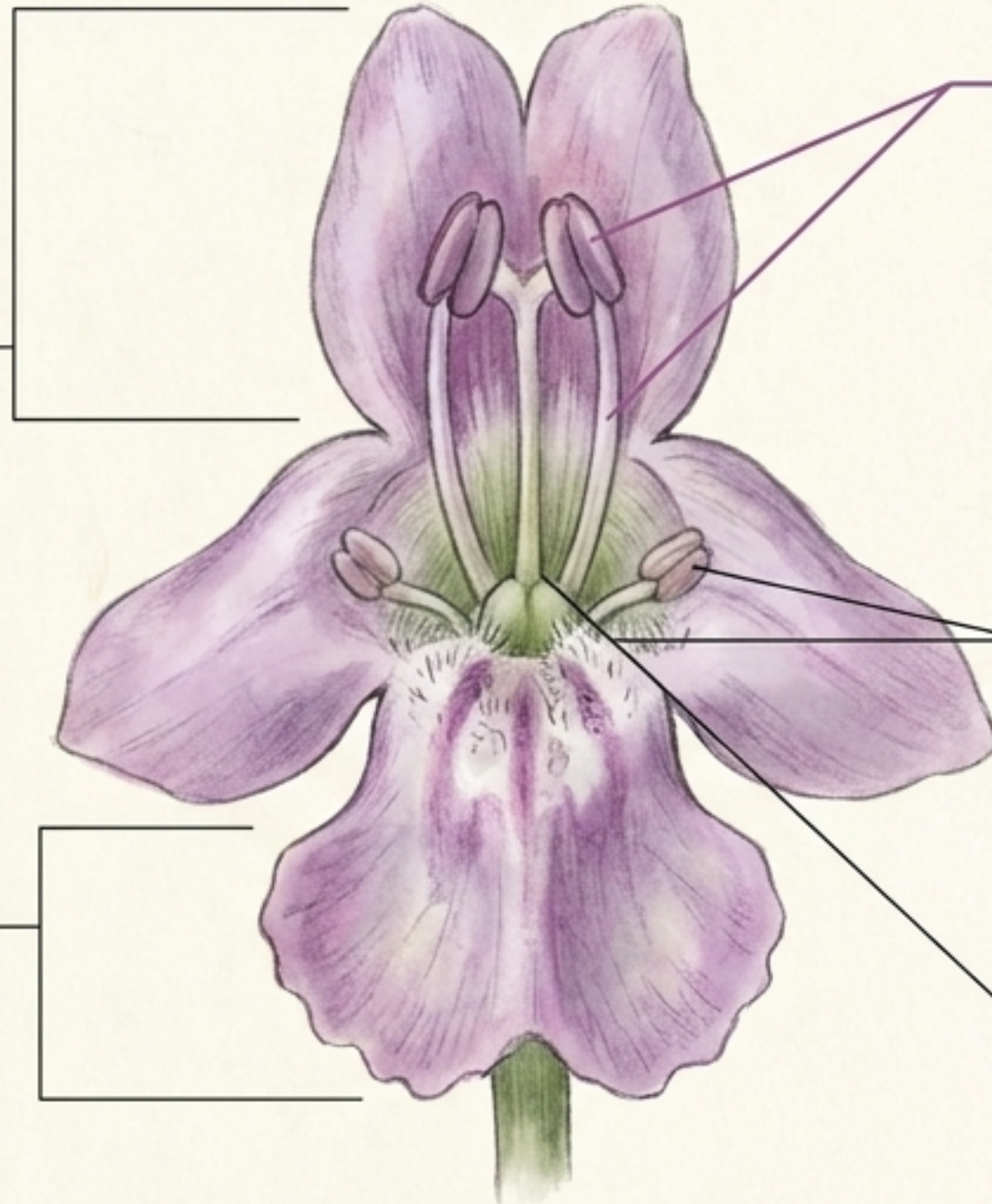
唇形花(しんけいか)のミクロ解剖学



わずか4~5mm (直径約3mm)

上唇(じょうしん)
浅く3つに裂ける。

下唇(かしん)
先端が少し凹み、根元には
短い毛が密生する。



完全な雄しべ (2本) :

上唇側にあり、花粉を入れる完全な「葯」を持つ。
(※学名の *dianthera* 「2つの葯」の由来)

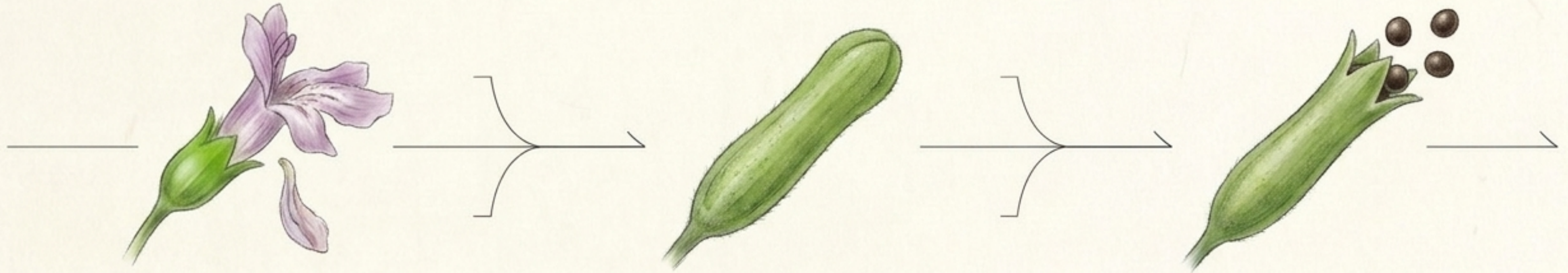
仮雄しべ (2本) :

下唇側にあり、葯を持たない退化した雄しべ。

雌しべ :

1個 (子房は4つに分かれる)。

開花から結実へのプロセス



Step 1: 花の終わり

花びらが落ち、苞（ほう）とガクが残る。

Step 2: ガクの成長

ガクが長さ5～7mmほどに成長し、筒状になって内部の種を保護する。

Step 3: 散布

ガクの奥で4個の分果（タネ）が作られ、熟すところぼれ落ちる。

タネの正体

長さ約1.4～1.5mm。茶褐色から黒褐色。表面には浅く大きな網目状の模様がある。

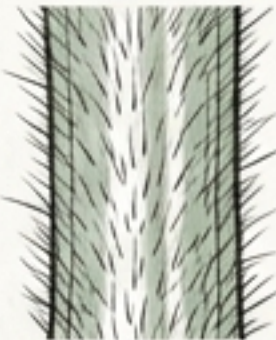


似て非なるもの：イヌコウジュの存在



野外でヒメジソを見つけたと確信しても、注意が必要です。ヒメジソには「イヌコウジュ」という、見た目が酷似した同属の近縁種が存在します。ぱっと見の姿形や咲く環境はほとんど同じ。では、フィールドでこの2つをどう見分ければよいのでしょうか？

フィールド識別マトリクス（ヒメジソ vs イヌコウジュ）

観察ポイント 	ヒメジソ	イヌコウジュ
葉の鋸歯 	4～6対。数が少なく、粗い。 （※最重要ポイント） 	6～13対。数が多く、細かい。 
茎・花軸の毛 	比較的少ない（まばら）。 	多く、密生している。 
ガクの上唇 	先端が針状に尖らず、丸みを帯びる。 	裂片の先端が鋭く尖る。 

足元のミクロ・サファリへ

普段は見過ごしてしまう道端の小さな草花も、レンズ越しに覗き込めば、完璧な設計図を持った一つの宇宙であることがわかります。

秋の野山で、わずか5mmの淡紅紫色の花を見つけたら、葉のギザギザ（鋸歯）を数えてみてください。それが、あなたとヒメジソとの出会いかもしれません。



ヒメジソの群生